



Title	北海道大学キャンパスの植物
Author(s)	高橋, 英樹
Relation	北海道大学キャンパスにみる自然と人間の歴史
Issue Date	2002-09-14
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/76099
Type	book part
File Information	18-19.pdf



北海道大学キャンパスの植物

高橋英樹
北大総合博物館

キャンパスで最も年老いた樹木は何才か？何という種類でどこにあるのか？これまで報告のあるキャンパス内樹高順位（春木・露崎・滝川 1989）から推測すると，理学部本館南側の通称「エルムの森」の一角，旧昆虫学教室東端の北側に位置する巨大なハルニレがそれであろう。2002年の計測では胸高直径248㎝で，およそ250才と推定される。このハルニレが芽生えて現在地に定着したのは西暦1750年ころであり，札幌農学校が開校した1876年より100年以上前のことである。キャンパスのそこそこに亭々とそびえるハルニレの大きな株の多くは，札幌農学校キャンパスが現在地に移ってきた時には既にこの地に生育していたと考えられる。

キャンパス植物の来歴

さてこのような北大キャンパスに生育する植物を来歴から分類すると，以下の3グループにまとめることができる。①札幌農学校開校以前より自生する植物，②開校以降，意図的に導入・植栽された植物，③意図的に導入・植栽されたものの逸出，あるいは意図せずに侵入してきた帰化植物。このグループ分けは時に難しく，同じ種でも複数の来歴のものがありうる。例えば胸高直径1m以上のハルニレはもともとの自生植物（①）だろうが，場所に寄っては意図的に後に補植された小さい株（②）もありうる。“原始林”のオオバナノエンレイソウは自生（①）だが，ファカルティーハウス「エンレイソウ」の北側には植栽された本種の株（②）もある。当初は人間の管理下で栽培（研究用苗畑，庭園樹など）されていた植物が管理範囲外に逃げてはびれば逸出植物（③）となり，おそらく現在キャンパスで猛威をふるっているシンジュやネグンドカエデなどの木本はこれにあたるだろう。いずれも風散布される翼果を多量につけ，初期成長も早い。ポプラ属（キャンパス内には種が特定できない数種が導入あるいは逸出している）やニセアカシアとともにこれら成長がよく，他の自生樹木に影響を与えるような樹種をどのように管理するかは今後の課題である（朝比奈1985を参照）。草本のヒメフウロやドクニンジン，イワミツバも③にあたるが，最初に意図的に持ち込まれたのかどうかは判然としない。これら草本の逸出・帰化植物も，ある場所においては現存植生に大きな影響を与えている（弓道場周辺の森林林床はイワミツバにより覆われている）。

自生植物を守ることは札幌農学校－北大キャンパスの原風景を守ることになり比較的容易に合意を得られそうだが，植栽植物や逸出・帰化植物をキャンパス内でどのように管理するかについては人により異論があり合意は簡単でない。

自生植物

現在キャンパス内でのまとまった樹林地としては以下の7ヶ所がある。1）低温科学研究所前（落葉広葉樹混生林），2）遺跡保存庭園（ハンノキ優占林とヤチダモ壮齡林），3）原始林（旧恵迪寮跡地周辺ヤチダモ優占林，旧楡影寮跡地周辺イタヤカエデ優占林），4）

体育館南側（ポプラ若齢林）， 5）中央食堂西側（落葉広葉樹混生林）， 6）地球環境科学研究科北東側（針・広混生林）， 7）旧農学部附属演習林苗畑（植林地）（春木・露崎・滝川 1989）。7）の植林地を除いた6ヶ所の林床やその周辺には自生植物が多く見られる。ハルニレ，エゾイタヤ，ハリギリ，ヤチダモ，ハンノキ，ヤナギ属などがこの地域での主な樹木だったと思われる。草本としてはオニシモツケ，オオハナウド，オオウバユリ，オオバナノエンレイソウ，ヒメザゼンソウなどが多かったと思われる。特記すべきはこのキャンパス内にもレッドデータ植物が残存的に自生していることである。例としてはフクジュソウ（国絶滅危惧II類，北海道絶滅危急種），エゾサンザシ（国絶滅危惧IA類），クロユリ（北海道希少種），ミクリ（北海道希少種），クゲヌマラン（国絶滅危惧IA類，）などが挙げられるが，フクジュソウやクロユリなどはこの10年以内にキャンパスから姿を消す可能性がある。

導入・植栽植物や逸出・帰化植物

研究林の苗畑や大学としての記念植樹を除くと，植栽植物についての正確な導入記録が意外と少ないようなのは問題である。個々の樹木の導入来歴の解明は今後の課題であり，各部署ごとの同窓会誌のチェックや退官教官・職員への聞き取り調査なども必要となる。逸出・帰化植物については簡単に上記したが，ヒメフウロ，ドクニンジン，イワミツバなどは北大キャンパスがその伝播の重要な中継地となった可能性がある。北海道の帰化植物の導入来歴を解明する上でも，北大キャンパスへの植物導入記録の解明は重要と思われる。

最後に，キャンパスの植物を調査する意義を考えてみよう。札幌市が立地するところの豊平川扇状地の原植生を復元する上での1資料となること（植生学）。孤立した生態系で衰退するであろう自生植物の動態研究，人間生活との共生の方策を探る研究の場（保全生態学）。さらに市民にとっては札幌における原植生・原地形（原風景）とその後の開拓の歴史（キャンパスの発展に伴う建築物の歴史など）を身近に体験できる場であること。学生にとってはキャンパスの自然や発展の歴史を学ぶことにより，北大生としての愛校心の涵養，学習意欲の向上に資する事ができよう。キャンパス内の附属薬用植物園や研究林苗畑，農場なども活用すれば，キャンパスだけでも植物分類学や生態学への入門的な実習の場として十分に機能を果たせる。フレッシュマンを対象として編集された『北大キャンパス実習用資料集（植物編）』（高橋・露崎・笹・東 2002）はこのような試みの一つとして位置付けられる。キャンパスにレッドデータプランツが自生している大学などは全国にそうはないのだから，我々はキャンパスに生育する植物の現状についてもっと目を向け，学ぶ余地があるように思う。

参考文献

- 朝比奈英三 1985「北大の自然：樹木めぐり」『楡の風』(14):6-10
春木雅寛・露崎史朗・滝川貞夫 1989「北海道大学構内の樹種構成について」『北海道大学農学部演習林研究報告』 46:191-222
高橋英樹・露崎史朗・笹賀一郎・東隆行（編） 2002『北大キャンパス実習用資料集（植物編）』札幌